

日常事物の記憶におけるきき手の影響

○北神慎司¹・堀田千絵²・八田武志³

(¹名古屋大学大学院環境学研究科・²樟蔭東女子短期大学生活学科・³関西福祉科学大学健康福祉学部)

キーワード: 日常記憶, きき手, 記憶バイアス

Effects of handedness in recognition memory for common objects.

Shinji KITAGAMI¹, Chie HOTTA² and Takeshi HATTA³

(¹Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, ²Department of Living, Shouin Higashi Women's Junior College,

³Faculty of Health and Welfare, Kansai University of Welfare Sciences)

Key words: Everyday memory, Handedness, Memory bias

目的

Martin を中心とする研究グループは、コインなどの日常事物を使って、その記憶ときき手の関係について、複数の研究を行っている。その中で、Martin & Jones(1998)の研究では、工事中の道路標識と歩行者横断の道路標識の再生実験(実験2は言語再生, 実験3は描画再生)が行われた。その結果、道路工事の標識(左向き的人物)は右ききの人のほうが、歩行者横断の標識(右ききの人物)は左ききの人のほうが、再生成績がよかった。つまり、これらの結果は、左右の方向性を有する道路標識において、きき手による記憶バイアスが生じることを示すものであり、彼女らは、これらの結果を運動イメージ(motor imagery)という概念によって解釈している。

それでは、同じように左右の方向性を持つ道路標識で、電車や動物など、人以外がモチーフになっているものでも、きき手による記憶バイアスが見られるのであろうか。これらは、自己中心的(egocentric)な運動イメージが喚起しづらいと考えられるため、記憶バイアスは見られないのではないだろうか。本研究では、再認形式のテストを用いて、これらの点について検討することを目的とする。

方法

実験参加者: 大学生 606 名 (3 大学, 計 5 つの授業)。

デザイン: 実験参加者のきき手(左きき, 右きき)の実験参加者間 1 要因計画。

刺激: 「道路標識, 区画線及び道路標示に関する命令(昭和 35 年 12 月 17 日, 総理府・建設省令第 3 号)」で定められている道路標識の中から、左右の方向性を有し、かつ、人や自転車など具体的なモチーフのある「自転車専用」, 「横断歩道」, 「踏切あり」, 「動物が飛び出すおそれあり(以下, 動物注意とする)」の道路標識 4 個 (Figure 1) を選び出した。これらの元画像をもとに、左右反転した道路標識の画像をそれぞれ作成した。

質問紙: 実験参加者のきき手を調べるため、「H.N.きき手テスト(八田・中塚, 1975)」を使用した。また、道路標識に関する事前知識を調査するため、運転免許の保有に関する質問紙を用意した。

手続き: 本実験は、集団形式によって行われた。まず、教室前方のスクリーンに、左右に道路標識が 2 つ(元画像と反転画像)提示され、実験参加者は、どちらが正しい道路標識かを回答すると共に、その道路標識の意味(記述形式)、確信度(5 段階評定)および遭遇頻度(「見かける一見かけない」の 5 段階評定)を回答するように求められた。参加者全員の回答が終わると、次の刺激が提示され、参加者は同様の回答を行った。なお、画像の左右の割当や、提示順序は、実験を実施した授業によって、カウンターバランスを行った。最後に、運転免許の保有に関する質問紙、および、H.N.きき手テストへの回答を各人のペースによって行うことが求められた。

結果と考察

実験参加者のスクリーニングは、次のような手順で行われた。まず、きき手テストのスコアを個人ごとに算出し、合計得点で -4 点以下を左きき (n=26), +10 点を右きき (n=323) として抽出した。次に、大学、性別、年齢、運転免許の保有状況という 4 つの属性において、左ききの参加者と適合する右ききの参加者 (n=204) を抽出した。したがって、分析対象となったのは、左きき 26 名, 右きき 204 名であった。

各道路標識におけるきき手別の正再認率を Figure 1 に示した。きき手によって正再認率が異なるかどうかを検討するため、道路標識ごとに χ^2 検定を行った。その結果、「自転車専用」と「横断歩道」の道路標識の正再認率において、きき手の違いによる有意な偏りが見られた(それぞれ, $\chi^2(1)=3.97, p<.05$; $\chi^2(1)=13.40, p<.001$)。

つまり、「自転車専用」と「横断歩道」の道路標識においては、Martin & Jones(1998)と同様、きき手による記憶バイアスが見られたが、「踏切あり」と「動物注意」の道路標識に対しては、先行研究とは異なり、そのような記憶バイアスは示されなかった。このような結果の際は、「目的」で既に述べたとおり、再認時に喚起される運動イメージの質的な違いによって生じているのではないかと考えられる。








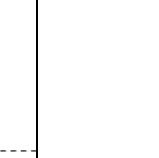
「自転車専用」		「横断歩道」	
			
左きき	右きき	左きき	右きき
69.2%	< 84.8%	61.5%	> 26.5%
「踏切あり」		「動物注意」	
			
左きき	右きき	左きき	右きき
69.2%	≒ 71.6%	65.4%	≒ 63.7%

Figure 1. 各道路標識に対するきき手別の正再認率 (ただし、「横断歩道」については選択率)

引用文献

- 八田武志・中塚善次郎 (1975). きき手テスト作成の試み 大西憲明教授退任記念論文集, 224-247.
- Martin, M. & Jones, G. V. (1998). Generalizing everyday memory: Signs and handedness. *Memory & Cognition*, 26(2), 193-200.